

■書評

# 建設一般の50年

A 5 判840頁 上製函入  
 本体 18,000円  
 旬報社刊

◎評者 同朋大学教授

上 畑 恵 宣

## ◎はじめに

一九九一年に始まったバブル崩壊後の不況は、完全失業率四・四％、失業者二九〇万人と戦後最悪の記録を更新しながら長期化し、国民生活を圧迫し、平成不況と名づけられ今なお続行中である。その結果は、仕事を失い、野宿を余儀なくされた人達が、全国で二十万人を超える異常事態となって現れている。

今そのときに、『建設一般の五〇年』——全日自労建設員林一般労働組合五〇年史編纂委員会編——の発行を見たことは、この深

刻な現状を切り開く一筋の光芒を私たちに与えるものとなった。

本書は、二部構成からなり、その大半は第一部「建設一般五〇年の歩み」に割かれている。第一部は五章にかけて詳述され、第二部で二一世紀を展望した「建設一般の歴史的伝統」が六つの視点で書かれている。最後に、五〇年史年表が国際国内の大きな動きと合わせながら三四ページにわたって記述されており、五〇年のたたかいが俯瞰できる。

失業者が多発し、多くの人達が路頭に迷う様は、戦後のひとときを思い起こさせるに十分である。そのときにオーバークラップさせな

がら、半世紀のたたかいが私たちに語りかけるものを読み取って実践的に役立たせていかねばならない。

為政者が失業者対策事業(失対)を終息させるにいかんが苦勞してきたか。だからどんなに失業者が巷にあふれていても、新たに公的就労事業を起こすことは第二の失対になるからと政府・自治体は頑なに拒否しつづけている。この状況を打破するためにも、本書を役立たせねばならない。

この五〇年史、すなわち全日自労の五〇年のたたかいから学ぶべきことはあまりに多く、限られた紙面では到底言い尽くせない。全

日自労のたたかいの中でも、特に公的就労事業を求めるたたかいがどのような展開されたかに絞って五〇年史を追うことにする。

## I 五〇年史が

単刀直入に

語っていること

「序にかえて」で、全日自労の運動と深く長く「組合の歴史とは何同じだけ」かわりつづけた江口英一さんは、この書は「五〇年の長い運動の中で守りつづけた建設一般の歴史的伝統の探求を通じて、今日の労働組合運動の飛躍的な発展に資するアイデアを広く提供することを目的としている」と述べている。私は、不況の中であえいでいる多くの失業者の生活と権利を守るためのたたかい、運動が、いま進むべき道を示す羅針盤を見る思いで本書をひも解いた。

五〇年史は最初、建設一般が

守りつづけた運動のスローガン、「失業と貧乏、戦争に反対して」「いのちと健康、生活と権利を守る」「組合はわたらの宝」に集約されているその特質について明らかにしている。第一は、その組織対象、組織基盤が労働者階級の最底辺に位置する、無権利化され分故させられた存在の「不安定労働者・非正規労働者の組合であること」、第二に、その組織の活動はまず、要求の掘り起こしから始まること。なぜなら、日雇労働者「労働者の中でもっとも苛酷な労働と極度に不安定な生活を強いられながら、その問題を社会化し顕在化させることが最も困難な状況に追いこまれている」からであり、そして、そこで発見された事実、問題は、「全面的な要求によってのみ解決される性格」のものであること。したがって、その労働と生活の安定を得るためには、勢い、雇用・労働の問題から、社会保険、平和の問題を含めた制度

的、全面的要求にならざるを得ないこと。第三に、組織の性格は、企業の枠を超えた、失業者も含めた一般労働組合であり、未組織労働者の組織化の役割をも担うものであること。第四に、その組織が掲げる要求は「階級貫通的な」ものであり、あらゆる階層に共通する国民の最低限の要求であること。そしてその要求実現は、地域闘争、自治体闘争、国民的統一行動、さらには世界的連帯の活動によって保障されること。以上の四点は、今私たちが直面している問題を解く際の重要なカギとしてあらためて確認しておく必要がある。

### Ⅰ 失業者対策事業、

#### 公的就労事業の

#### スタートは「仕

#### 事よこせ」の

#### たたかいから

不安定労働者、すなわち日雇労働者にとって、失業と雇用はたえず繰り返される日々の問題である。労働と生活の安定が保障されなければ、やがて野宿を余儀なくされ、路上死という非人間的な死に至る。今、日本ではそうして路上死する人が年間一〇〇〇人もいる。

本書は、第一部の「五〇年の歩み」の第一章第一節で、「大量失業の中から「仕事よこせ」のたたかい」として敗戦直後の窮乏から多くの失業者が職安に押しかけ、門前で徹夜して「仕事よこせ」のたたかいが生まれたこと、その運動の高まりの中で「緊急就業対策要綱」が決定され、公共事業への失業者の吸収が図られ、やがて緊急失業対策法（一九四九年）の成立を見ることになったことを伝えている。

しかしその後の失業の深刻化（ドッジラインによるデフレ不況と失業者の増大）は、失対事業による失業者吸収人員を低下させ、

多くの労働者が仕事につけず、三日アブレるといふ状況を生み出した。このようなきびしい失業状況のもと、失業者は死にも狂いのたたかいに立ちあがらざるを得なくなり、「仕事よこせ」「アブレ反対」運動が各地で起こった（本書の記述から）。

大阪の釜ヶ崎で、全国の大都市で、いま多くの高齢日雇労働者が打ち続く不況で仕事に就けず、路上で瀕死の状況に置かれている。昨年八月の調査で大阪市内では八〇〇〇人を越える野宿者が確認され、全国では二万人に及ぶと推定されている。大阪では釜ヶ崎日雇労働組合やキリスト教協友会などが「釜ヶ崎就労・生活保障制度実現を目指す連絡会（反失業連絡会）」を結成し、「仕事よこせ」「野宿しないで済む生活保障を」の要求で命がけでたたかっている。このたたかいと五〇年史が記す「仕事よこせ」のたたかいとは相通するものがある。

しかし、大阪釜ヶ崎「反失業」

が掲げる失業対策としての公的  
就労事業の実施要求は、政府が失  
対事業をやつとの思いで終焉させ  
た後だけにその実現は極めて困難  
な状況に置かれている。東京山谷  
での第一次オイルショック後の不  
況の中で全日自労などが勝ち取っ  
た「特別就労対策事業」や「公共  
事業への日雇労働者吸収」など  
も、大阪では、どんなに声を大き  
くしても、当局が拒否し続けてい  
る。

### II 組織をつくり、 団結の輪を広げる

本書は続く。失業者が激増する  
中で、「仕事よこせ」のたたかいが  
広がったのに対し、政府は、失対  
事業への就労制限、運動の排除を  
進めた。失対労働者はそうした政  
府の攻撃に対抗できるだけの幅広  
い組織をもつことを迫られ、全日  
自労が結成される(一九五三年)。  
日雇・自由労働者の全国組織の誕

生である。

こうして、失対事業という枠に  
とどまらない、労働組合としての  
要求を掲げた運動が始まる。たた  
かいの輪を広げる、団結の輪を広  
げる。こうした原則に立つ運動が  
その後の度重なる失対打ち切りの攻  
撃をはねかえしていく。このこと  
も、現在の反失業、生活保障の運  
動に示唆的である。

大阪では、一九九一年バブル崩  
壊で始まった不況で、真っ先に雇  
用の場から排除された日雇労働者  
が、寝るところも食事代も事欠く  
状況に追い込まれ、多くの人が路  
上生活を余儀なくされていった。

この窮状の打開を求めて、地域の  
ボランティア団体や、日雇労働組  
合がそれぞれ、大阪府・市に対策  
を求めた。大阪府は雇用対策を民  
間への求人開拓に求めるだけで逃  
げ、大阪市の場当たり的な対応  
は、九二年の釜ヶ崎第二三次暴動  
となって噴出した。こうしたな  
か、ここでも、幅広い組織体制が

求められ「反失業」の結成を見た  
のである。

### IV 新たな公的 就労事業の確立を求めて

一九六〇年代、政府の積極的勞  
働力政策が始まり、この中で失対  
打ち切りの策動が進行する。石炭か  
ら石油へのエネルギー政策の転  
換、産業のストラップ・アンド・ピ  
ルドが進められ、農業・漁業では  
食べていけない状況が作られ、農  
村から都市へと大勢の若者が移動  
した。全国的規模で農民の貧窮働  
者化が進んだ。日雇労働市場は拡  
大強化された。大阪釜ヶ崎には西  
日本を中心に二〇代三〇代の働き  
盛りの労働者が呼び寄せられ、日  
本最大の日雇労働市場が形成され  
ていく。

このような中、全日自労は組織  
をあげて運動を広げ、国民との連  
帯を強めながら、失対打ち切り反対  
のたたかいを繰り広げた。産炭地

では離職者対策を求め、「地域開  
発就労事業」を始めさせた。雇用  
関係がないからと除外扱いにされ  
ていた対自治体との団体交渉権  
も、大衆闘争の広がりや裁判闘争  
の積み上げで勝ち取る。社会保  
険制度改悪とのたたかいても、失業保  
険、日雇健康保険改善のたたかい  
と一体にして進めた(第二章)。

一九七〇年代の「失対再確立」  
のたたかいは、第三章Ⅷ〇年代  
の新たな公的  
就労事業確立のたた  
かいへと進む。高齢者の就労保  
障要求を掲げての、中高年事業団の  
全国的展開に結実していく。「地  
域と住民に役立つ失対事業」「良  
い仕事をし、地域住民に役立つ事  
業団」などの政策が世論の支持を  
得、自治体を動かすのである。

このあたりは、現在大阪で進め  
られている運動を彷彿とさせる。  
大阪では第二の失対になるから嫌  
だと頑迷に拒否し続けた大阪府・  
市に「高齢者特別清掃事業」を契  
機させた。まだその規模は小さい

が、労働は街の環境保全、さらにごみの分別・資源化・有害物抽出で地球環境の悪化防止に役立つ。

全日自労は建設一般へと組織の拡大強化をはかりながら、高齢化し失対から排除されていく「仲間」の就労と生活を守るために、「高年齢者事業団」づくりを進め、

公園清掃の受注、地域美化推進事業の獲得など公的就労事業の実現を進める。さらには、「高年齢者雇用安定法」で法的根拠を得た「シングルパー人材センター」と結びつけて就労の場の確保を図ってゆく。

日本最大の日雇労働市場である高年齢者の街となっている。建設一般のこのたたかいかいも益々階地区に極めて示唆的である。

「高年齢者の仕事とくらしを求めらる公的就労事業」づくりに色々な工夫を重ねていく取り組みも先例として教訓に富む。炭坑離職者を対象にした環境整備事業、事業団運動の全国的展開の中で、ホーム

ヘルパー、緑化、駐輪場、老人給食、ビルメンテナンスなどの事業種目が開拓されていく。今、益々時の「反失速」は、日雇高年齢労働者の雇用保障を求めて、公的就労事業の場をどう作るか模索している。労働者協同組合の結成と合わせて、五〇年史はその方向を示している。

第四章「経済疲弊による国民生活の危機と建設一般の運動」は、かつてなく雇用・失業問題が深刻化する中で、緊急にまとめられた全労連の「緊急雇用対策」の提案、それに呼応した建設一般の「直面する雇用失業対策について」の提案など、政策要求が前面に押し出されている状況を記す。そして、二一世紀を展望して「私たちが今必要としているものは力の結集」だと、産業構造の転換、正規雇用の減少、雇用形態の多様化に対応できる労働組合づくりを呼びかける。

労働によってしか生活し得ない

# ◎大失業時代に備える

道幸哲也  
小宮文人 著  
島田陽一

## リストラ時代 雇用をめぐる 法律問題

解雇を突きつけられたとき、退職を迫られたとき、転職したいとき、どうしますか？  
さまざまな事例をもとにリストラと雇用不安に対処するハンデいな書。

四六判並製・定価 本体二〇〇〇円＋税

旬報社

東京都文京区目黒5-14-13 電話03(3943)2811 FAX03(3943)8388

私たち労働者が依頼できるのは、労働組合でしかない。残念ながら、日本の労働者は今、そこへ結集して状況を変えようとする気が欠いている。ここに、現在日本の国民生活の危機がある。機関紙『じかたび』で、労働者の中の要求を掘り起こし、要求を組織化し、統一した要求でたたかい、おみくろ連の力で支え、たたかいの輪を広げ、包囲してたたかいてほしい。全日自労・建設一般の歴史に今こそ学ぶときではないだろうか。

### おわりに

本書の構成について、少しばかり感想を述べる。第一部の「五〇年の歩み」については、各部会の動きをまとめたという思いが、第三章・八〇年代のたたかいと第四章・九〇年代のたたかいを分断している。ひたひたと押し寄せる大きなうねりのような五〇年のたたかい、そのダイナミズムを説き

に伝えて欲しかった。もっと時系列的に集約して運動・たたかいを追って、その中に、業種別運動の展開、たたかいをちりばめた方が良かったのではないだろうか。五〇年という長い歴史を整理する方法としてやむをえない仕儀であったのだから、第二部との記述と重複する、後戻りする記述も見うけられる。本書は全日自労・建設一般の文字通りの正史である。遺漏は点検して欲しかった。

もう一点追加させていただく。機関紙活動についての記述である。第二部で建設一般の組織の特徴でふれられてはいるものの、機関紙『じかたび』が運動・たたかいの中で果たした役割についても少し詳しくふれて欲しかった。機関紙中心の組合活動といわれ、その典型を切り開いた『じかたび』である。私たちは、そこから多くのものを学び、励まされてきた。

年表については、政府・行政の

動き、攻撃と、建設一般の動きが対比できるように記述されていたらなお良かったと思う。たたかいの経過とその柱が年表で見えるようにして欲しかった。漏れている事項がいくつか見うけられる。

そのほか、欲を言えば運動の節目の写真とか、機関紙『じかたび』の縮小版とか、失対登録の総数や新規、廃止等のデータが年次別数表などでちりばめられていたらなお良かったと思う。

何はともあれ、この書が語る全日自労・建設一般の半世紀は、失業時の雇用と生活保障を勝ち取るために、この組織に結集した労働者がどのようなたたかいを繰り広げたか、組織の拡大、組織の団結をはかり、たたかいの輪を広げながら、国民すべてに及ぶ社会保障の確立に、いかに大きな力を発揮したかを如実に示す。

現状を打開するためにも、いま運動の原点に立ち返るチャンスである。大部で高価だが、社会運

動・労働運動に関係する人はもちろん、自治体・政府関係者にとっても必読の書といっている。

(つえはた・よしのぶ)

